

しまなみ農業だより

ツクシとスギナ



3月になると色々な植物が顔を出しはじめ、冬から春の風景に変わってきますが、個人的には春の風物詩といえはまずツクシを思い浮かべます。ツクシはタンポポやレンゲの花と同じく郷愁を誘い、一面に生えているのを見ると、今でも摘み取りたくなる衝動にかられます。

ツクシはスギナにくつついて出ている様に見えることから「付く子」、袴の所でついている様に見えることから「継ぐ子」となったことや、土から出てきた姿が「筆」に似ていることから「土筆」という字を当てられるようになったとも言われています。スギナは杉の葉に似ていることから「杉菜」の字を当てられたと言われています。

ツクシとスギナは土中で地下茎（ちかけい）でつながっており、ツクシはスギナが胞子を生産し放出させるために、春の一時にだけ成長させる茎に過ぎません。ツクシは普通の植物で言えば種を作る花にあたり、スギナは栄養を作る葉にあたります。植物図鑑には普通「ツクシ」では掲載されておらず、「スギ

ナ」で引かなければならないのはそのためです。冒頭、ツクシに対する郷愁の念を述べましたが、農業にかかわる立場から見ると、ツクシやスギナに対する感情は180度逆転します。

とある山菜の本に、ツクシについて「唯一採りつくす心配のない山菜」と書かれていたが、ツクシやスギナは農業においては、とてもやっかいな雑草で、アスバラガス畑などでは、雑草のうちスギナが最も防除困難といわれており、独占的かつ多発生している畑をよく目にします。

畑でのスギナの発生を抑制するためには、その生態を理解して対応する必要があります。

① 土壌酸度の誤解

スギナは普通の作物が育ちにくい酸性土壌の環境を好んで繁殖すると言われることがありますが、近年の研究ではそれは誤りであることがわかっています。スギナは酸性土壌でもアルカリ土壌でもよく生育することが確認されており、スギナを生えにくくするために石灰資材を散布して土壌をアルカリ性にするのは、あまり効果的とはいえません。スギナが酸性土壌を好むという説が広まったのは、スギナが丈夫で不良な土地でも育つため、他の作物より目立つのが原因と考えられます。スギナがケイ素を利用して植物体組織を形成しているケイ酸植物であり、ケイ酸植物がアルカリを嫌うという説から石灰資材を散布する事例も見られますが、実際に石灰資材を散布してもスギナの生育は抑制されません。

② スギナの生育と増殖

スギナの生育は、春に地下茎から地上茎が伸びるところから始まります。同時に地下茎に生育・増殖のための養分が蓄積され、地下茎が伸長しますが、その速度は最初の2ヶ月は緩やかで、2ヶ月を過ぎたところから急激に伸長します。スギナの増殖は、ツクシから拡散される胞子によるものと栄養分を蓄えた地下茎や塊根により行われます。スギナの地下茎は多くが土中に深く張っており、2mもの深層でも長く生き残ります。畑を耕す際にこの地下茎を切断すると断片がほ場内に拡散し、それがまた増殖します。

これらのことから、スギナ退治のポイントは「地下茎に養分を蓄えないうちにダメージを与える」ことであることがわかります。

よって茎葉処理型除草剤の散布時期は、スギナが生育を始めて地上茎が出そろい、高さ20~30cmとなった頃が最も良い時期です。この頃に地上部を枯らせれば、スギナは地下部に栄養を送れなくなり、生育・増殖が抑えられます。一度ではスギナは死滅しませんが、またスギナが生育を始めて20~30cmになった頃に再度防除します。スギナが見られなくなるまで、これを根気よく繰り返すことが重要です。

